



CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって	3
活動報告	
■国際シンポジウム	
明治大学国際シンポジウム「学術分野の男女共同参画と多様性」	6
マンガ「ジェンダーセンター一年記」	12
■定例研究会	
第1回「日本における子どもと子ども像の歴史」	18
第2回「『おたく』とジェンダー」	22
第3回「フランスの女性誌史」	26
■上映会・学生企画イベント	
“PHD MOVIE 1&2” 上映会	30
学生企画“MEIJI ALLY WEEK”	33
■他機関との連携・協力	
大学院情報コミュニケーション研究科特別講義「フィールド調査で語られない性」	38
明治大学専任教授連合フォーラム「明治大学の男女共同参画」	38
■研究プロジェクト成果報告	
A「女性専門職の過去・現在・未来」	
武田政明・吉田恵子・細野はるみ・平川景子・長沼秀明・岡山礼子	40
B「企業における女性の活躍促進に関する研究」牛尾奈緒美	41
C「後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続」田中洋美・石田沙織・他	42
■業績一覧（2015年度）	
●ジェンダーセンター運営委員業績一覧	44
●ジェンダーセンター運営委員会会議録	47
●ジェンダーセンター運営委員一覧	48
●編集後記	49





年次報告書の刊行にあたって

2015年度の活動を見渡す時期になりました。情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの活動にもおよその流れができ、学内外の多くの方々に支えられて今年もいくつかの成果を重ねることができました。今年度は通常の定例研究会の他に二つの大きな行事、国際シンポジウムとLGBTへの理解促進イベントを実施いたしました。

国際シンポジウムは、本ジェンダーセンターと研究協力関係にあるタイのシーナカリンウィロート大学、インドのクマウン大学との間で進めてきたジェンダーフォーラムが母体となっています。今年度は明治大学で開催することは以前からの約束でしたが、今回、大学の女性研究者研究活動支援事業推進本部、法科大学院のジェンダー法センターとあわせて三機関の共催の形で、より膨らみのある行事として展開することができたと思います。同時に、大学として男女共同参画の施策が急速に進んできたこともあり、当ジェンダーセンターの位置づけや役割もはっきりとしてくるのではないかと思います。

今年度の行事として特筆すべきことは、ジェンダーセンターの行事に学生からの発案の企画が取り上げられたことです。これまで学生向けのイベントはいくつかありましたが、主体はあくまで運営委員会側でした。今回は、企画、資金の調達、広報なども含めてすべて学生の手で創り上げられたものでした。内容もLGBTの当事者たちがそれへの理解を深めるための活動として自分たちで企画し、よく練りあげたもので、反響も大きく、いろいろな意味で収穫の多いイベントとなりました。ジェンダーセンターの活動に学生を引きつけるのは一つの課題でしたが、今後はSNSなども大いに活用して広報に力を入れたいものです。

現政権が「一億総活躍社会」ということを提唱し、「女性の活躍」を掲げていることもあり、あらゆる方面で男女共同参画の気運が盛り上がり、経済活動を活発にするための子育てや介護の支援などの具体的な施策がたびたび話題に上ります。昨年度に明治大学も文部科学省の「女性研究者研究活動支援事業」に採択され、大学を挙げてこの問題への関心が深められ、推進のための具体策が練られていくのはいうまでもなくとても喜ばしいことであり、ジェンダーセンターが当初求めてきた流れであるといえます。ただ、本来、ジェンダー問題は多様性への理解を深めるという意味では、競争社会の原理にそのまま組み込まれることへの警鐘を鳴らすこともその役割の一つかと思われます。

何はともあれ、ジェンダーセンターに様々な方面から関心を持ち、ご協力・ご参加いただける皆様方のご支援により我々の活動は支えられております。併せてそれを実施するための運営委員の先生方、事務局スタッフの皆様のご尽力に対しても、ここに厚く御礼申し上げます。

2016年2月19日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長
細野はるみ





国際シンポジウム





明治大学国際シンポジウム



「学術分野の 男女共同参画と多様性」

International Symposium:
Gender Equality and Diversity in the Research Environment

共催：明治大学男女共同参画推進センター女性研究者研究活動支援事業推進本部*
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター 明治大学法科大学院ジェンダー法センター
後援：明治大学専任教員連合会

2015年 **11月6日**(金) 開会式・全体会 **7日**(土) 分科会
会場：明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント

11月6日(金) 開会式・全体会

〈会場〉グローバルフロント1階グローバルホール
〈時間〉15:00~17:00(開場14:30)
〈言語〉(英語・日本語、通訳あり)

- ・開会宣言・趣旨説明・ロゴマークの発表
女性研究者研究活動支援事業推進本部代表、法科大学院ジェンダーセンター長 辻村みよ子
- ・開会挨拶 明治大学副学長 勝悦子
- ・来賓挨拶 内閣府男女共同参画局長 武川恵子
- ・海外ゲスト挨拶
チョンブヌック・K・バームブーンウィワット (タイ・シーナカリンウィロート大学准教授)
- ・基調講演
 - ・大坪久子 (日本大学薬学部薬学研究所上席研究員)
理系分野における男女共同参画・女性研究者支援について
 - ・ジャッキー・スティール (東京大学社会科学研究所准教授)
学術分野の男女共同参画政策の世界的動向
- ・分科会紹介
男女共同参画推進センター副センター長、情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長 細野はるみ
- ・閉会挨拶 明治大学副学長、男女共同参画推進センター長 長尾進
- ・司会 情報コミュニケーション学部専任講師 藤本竜太郎
- ・全体会コーディネーター 商学部教授 中林真理子

11月7日(土) 分科会

【第1分科会】情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター主催・推進本部共催

〈会場〉グローバルフロント17階C5会議室
〈使用言語〉英語(一部日本語、通訳あり)

A [21世紀を研究者として生きる—
女性のアカデミック・キャリアにおける機会と障壁]
(Living as a Researcher in the Twenty-First Century:
Opportunities and Obstacles to Women's Academic Career)
〈時間〉13:00~15:30 ※事前申込制 申込先: gender@meiji.ac.jp

B [タイにおける女性のエンパワメント—
社会的・経済的・文化的状況]
(Women's Empowerment: Social, Economic and Cultural Aspects in Thailand)
〈時間〉16:00~17:30 ※事前申込制 申込先: gender@meiji.ac.jp

【第2分科会】法科大学院ジェンダー法センター主催・推進本部共催

後援：日本弁護士連合会、日本女性法律家協会、ジェンダー法学会

「女性研究者・法曹養成と男女共同参画政策」
(Promoting Female Researchers and Lawyers through Gender Equality Policies)

〈会場〉グローバルフロント1階多目的室
〈時間〉10:00~13:00
〈使用言語〉日本語

角田由紀子・打越さく良弁護士等講演

※入場自由 問合せ先: cgai@meiji.ac.jp

【国際シンポジウム関連イベント】(事前申込制 申込先: gender@meiji.ac.jp) <http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>
日韓若手女性研究者フォーラム 「身体・表象・ジェンダー」(共催：明治大学情報コミュニケーション研究科 成均館大学校芸術学研究所 他)

明治大学女性研究者研究活動支援事業推進本部

〒101-8301
東京都千代田区神田駿河台 1-1
明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン7階
TEL: 03-3296-4655 FAX: 03-3296-4656
E-mail: danjo@meiji.ac.jp
URL: <http://www.meiji.ac.jp/koho/diversity/index.html>



無料
託児ルーム開室
託児所をご利用の方は
事前申し込みが必要となります。
10月30日
締め切り。



報告(開会式・全体会)：細野はるみ(情報コミュニケーション学部教授)

初日の全体会・開会式では、主催者側、来賓、海外ゲスト等の挨拶、2つの基調講演などが行われた。

開会宣言・趣旨説明	法科大学院教授 辻村みよ子
開会挨拶	国際交流担当副学長 勝悦子
来賓挨拶	内閣府男女共同参画局長 武川恵子
海外ゲスト挨拶	シーナカリンウィロート大学准教授 チョンプヌツ・パームプーンウィワット
基調講演 1	日本大学薬学部薬学研究所上席研究員 大坪久子
基調講演 2	東京大学社会科学研究所准教授 ジャッキー・スティール

基調講演 1 人目の大坪久子氏からは、「理系分野における男女共同参画・女性研究者支援について」と題しての講演があった。その中で、国は科学技術基本計画実現のため科学技術基本法を策定して女性研究者の支援を図ってきたが、1996年(平成8年)の第1期から5年ごとに重点課題の位置づけや数値目標などを見直し、各地の大学や研究機関でもそれを導入した成果が上がってきていることなどが紹介され、特に男女共同参画の困難な理系の分野でも意識改革は確実に進んでいることとともに、さらに今後の課題と展望が示された。今後も子育て支援策の充実やポジティブ・アクションなどの実施でまずは女性研究者の基数を増やすことが重要である点が強調された。

2人目のジャッキー・スティール氏は「学術分野の男女共同参画政策の世界的動向：Gender Equality and Diversity Policies within Research and Academia: Global Trends」と題して、主として政治や経済活動など社会的な場面における女性の社会参画、意思決定過程への参加の様態について語った。特に、政治分野や企業、学術場面での意思決定にかかわる責任ある立場の女性の少ないことが日本においては問題であることについて、国際比較の観点から述べられた。近代の法体系の出発時点では男性優位社会であったことは否めないが、今後、すべての分野において女性が輝くためには男性の何が変わるべきであるのかに焦点を当てるべきであるとした。

ジェンダーセンターの2015年度の最も大きなイベントの一つがこの国際シンポジウムであった。「大きな」というのは、ジェンダーセンター単独の行事ではなく、多くの部署や組織が関与して協力し合って一つのシンポジウムを企画・実行した、という意味でもある。



とはいえ、今回のシンポジウムの母体となっているのは、この数年来、本ジェンダーセンターが研究交流を続けてきているタイのシーナカリンウィロート大学との連携事業「ジェンダーフォーラム」であった。第1回目がインド・ヒマラヤのクマウン大学、第2回目がシーナカリンウィロート大学で、第3回目は明治大学が担当する、というのかねてからの合意事項であった。しかし、明治大学は大学全体としては大規模であるが、ジェンダーセンターは比較的小規模な新学部である情報コミュニケーション学部内の組織であり、そこで国際学会を開催することは人的にも経費的にも困難であろうとは当初から予想された。時あたかも明治大学として「女性研究者研究活動支援事業」が発足して男女共同参画推進事業が進んだ時期と重なり、法科大学院の辻村みよ子教授のご協力を仰ぐことで、大学内諸機関の連携協力の下に進めることができた。上記の事業は主として科学技術分野の女性研究者を支援することに主眼があるが、そこに法科大学院、



また情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターも加わったの合同国際シンポジウムで、ある意味、内包した分野がシンポジウムのタイトル通り「多様性」を顕然とさせたかの感がある。

なお、「ジェンダーフォーラム」は共同で企画した大学を一巡したことになり、本ジェンダー

センターとしては、今後ジェンダーフォーラムをどのように継承し発展させるかといった点も含め、タイはじめ海外研究機関とも研究交流のあり方について検討を重ねていきたい。

報告(第1分科会)：田中洋美 (情報コミュニケーション学部准教授)

情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター主催の第1分科会では、二つのセッションを行った。両セッションともに登壇者の発表とその後の質疑応答ともに有意義な議論



の機会を提供することができた。

セッション A 「21 世紀において研究者として生きる—女性のアカデミック・キャリアにおける機会と障壁」では、パネルディスカッションを行い、研究者・大学教員のキャリア形成の現状について国際比較と男女共同参画の視点から検討した。日本、オランダ、ドイツ、アメリカ、タイといっ



た異なる国・地域でアカデミックなバックグラウンドを持つ研究者らが自らの体験を踏まえつつ、2010 年代の現在、研究者として生きるということにどのような問題があり、またいかなる対応が可能であるのかを議論した。

平田佐智子氏（明治大学）は、日本のポストドクター問題について話題提供し、関連政策を整理するとともに、ポストドクターと呼ばれる若手研究者の多くが、所属機関において孤立している現状について紹介した。デアドリー・スネープ氏（デュースブルク・エッセン大学）は、オランダとドイツの大学で学んだ経験から、ドイツの大学において博士課程入学や院生対象の研究職を得る上での差別はなかったものの、「科学は男性のもの」という女性蔑視の風潮が、潜在的ジェンダーバイアス (implicit gender bias) として今もヨーロッパの大学文化に残存していることを指摘した。チェルシー・シーダー氏（明治大学）は、アメリカの大学では院生になると奨学金受給や教員スタッフとして教育経験を積むことができる等のメリットもあるものの、近年アメリカでも予算削減や任期制ポジションの増加が見られ、博士号取得後もアカデミックポストに就職できない人々が増えていると述べた。

最後に、チョンプヌツ・パームプーンウィワット氏（シーナカリンウィロート大学）からは、大学教員の女性比率が 50% を超えるタイの現状についてお話があった。タイでは 24 の公立大学のうち女性の学長をもつ大学が 5 つあり、大学教員の女性比率が 50% を超えている (UNICEF2013 年データによれば 51%。なお日本の大学の本務教員に占める女性比率は 18.2%。学校教員統計調査 2007)。しかしながら、タイにおいても職格が上がるにつれて女性比率は減少する (助教までは半分以上、准教授では 49.34%、教授は 29.91%)。



チョンプヌツ氏の所属大学では経済学の女性教授は3人であり、政治学ではひとりもない



という。以上のことから、タイの大学においてもガラスの天井は未だに存在することがわかった。

以上のような各国の状況について確認しつつ、現状にどのように介入できるのかについても意見交換がなされた。とりわけ本セッションでは、個々の研究者にできることを中心に議論し、次のような提案がなされた。

第一に、孤立しがちなキャリア形成の初期にある研究者や女性をはじめとする大学等における少数派の研究者

たちが相互につながることである。例えば、平田氏は、同人誌『月刊ポストドク』を刊行し、孤立するポストドク研究員たちが決してひとりではないことを伝える活動を行っている。こうした氏の活動は当事者やかつてポストドクだった多くの研究者の共感を呼んでいる。またシーダー氏は、アメリカの大学において院生たちが自らの利益のために「組合」をつくり、大学側と団体交渉している現状を伝えるとともに、研究者同士が草の根レベルでネットワーキングし、情報共有や相互支援することの重要性を唱えた。

第二に、少いながらも存在する女性教員を可視化することである。マイノリティにとっては同じ境遇のロールモデルの存在が大きな意味を持ちうる。スネープ氏は、自分の周りにいるシニアの女性教員の存在に励まされると語った。また育児と研究の両立に悩む一般参加者からは、先輩女性研究者の両立経験を聞く機会が欲しいとの要望が出されたことも付記したい。



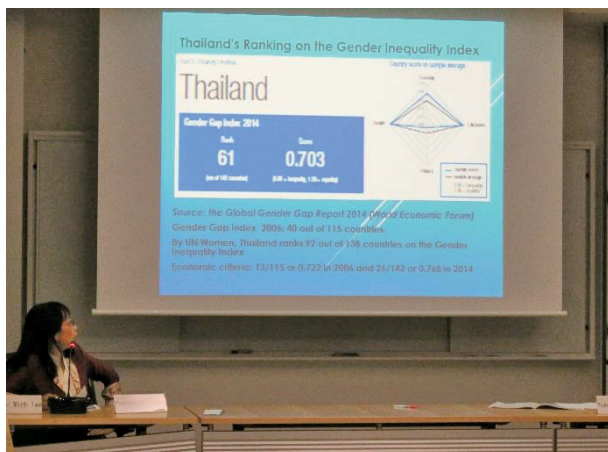
第三に、「スロースカラシップ」(slow scholarship) の提唱である。これは近年アメリカの研究者の間で生まれた考えで、キャリア形成における発表論文数重視といった業績中心主義への異議申し立ての意味がある。無理せず焦らず、情熱を失わずに研究を続け、また研究以外の面においても自分の人生を謳歌したいという素朴な欲求を表現する人々が出てきたことを示している。

学術の世界は、歴史的に女性やマイノリティの参入が遅れ、男性が中心となって営み、作り上げてきた。本セッションを通して、そのような場で女性（およびその他の少数派の）研究者が活躍する上では障壁があることが再確認されたが、同時に、個々の研究者が



自ら直面する問題とどう折り合いをつけていったらよいのか、いくつかの方法についても言語化することができた。

続くセッションB「タイにおける女性のエンパワーメント」では、本センターが2013年から学術交流を続けているタイのシーナカリンウィロート大学のジェンダー研究者による



研究発表が行われた。また UNDP バンコク支局のアナリストである山本由美子氏にコメンテーターとしてご登壇いただいた。

チョンプヌツ・パームプーンウィワット氏、パウイーナ・レクタクン氏の発表では、女性の労働参加率を地域別にコホート分析した結果が示された。日本と比較して最も興味深かった

のは、近年（2014年データ）バンコク市内の女性労働がいわゆる「M字型曲線」を描くようになったということである。従来タイでは見られなかった新しい労働パターンが都市部に見られているわけである。両氏によれば、タイの都市部において中産階級が増加し、主婦が増えているとのことであった。これは、かつての高度経済成長時代の日本と似た状況がバンコクにおいて起きていることを意味する。

ブイ・ティ・ミン・タム氏の発表では、教育、労働参加、政治参画等に関する OECD 指標を用いてタイにおける女性の社会的・経済的・政治的地位について説明があった。タム氏の発表で興味深かったことは、労働参加、とりわけ管理職に占める女性比率が極めて高いこと、にもかかわらず議員や大臣に占める女性比率は決して高くないことである。日本は企業組織、議会等公的機関、ともに女性の参画が進んでいないため、両者を同じ水準で論じてしまいがちかもしれないが、両者の間には質的な違いがある可能性が示唆された。

これらの発表について、コメンテーターの山本氏からは、タイのジェンダー問題について考える上で、地域間格差の問題が重要な意味を持つことが指摘された。経済発展は、一国の内部で均一な社会空間を生み出してはおらず、貧富の差をはじめとするさまざまな差異や格差を引き起こしている。言うまでもないが、ある社会の理解には、その社会が内に関わる多様性ないし差異への配慮が不可欠である。山本氏のコメントを通して、このことの重要性を改めて認識することとなった。



ジェンダーセンター
年記
ハロジャガイモで一歩

今回6月の特別講演会で
司会もどきを
務めさせていただいたご縁で
再び登場

石田沙織
〔情報コミュニケーション研究科所属〕

この報告書は
先生方の報告書の裏面
もといB面として
万事が万事軽く
仕上げてあります。

なお筆者は日々
研究したりおたくしたり
夢見たり最近では就活にも
必死になったりしていますが
研究楽しいです(恍惚)。

前年度報告書において「タイ道中記」と題した
軽い報告書漫画を描かせていただいたところ

「食べすぎじゃない?」
と突っ込まれましたが

乾パンには
保存期限は長く
高カロリーだし
何よりも美味しい

乾パンの種類ばかり
食べてる写真
ツイーに載せてたら
おた(コメント)で
差し(角難い)が
食糧多くなりました

安心して下さい。
今回は食べていませんよ

前年度(2014)の報告書では
11月頭にタイは
シーナカリンウィロート大学
にて行なわれた
学際シンポジウムに
ジェンダーセンター
メンバーの一人として
参加した折の諸々を
描かせていただきました。

この頃ドットより
デアドリさんが客員
研究員として来日
以降大変お世話になる

定例研究会① ↓
4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 ...

定例研究会② ↓

定例研究会③ ↓

MEJI ALLY
WEEK ↓
上映会 ↓
国際シンポジウム ↓

今回はジェンダーセンターの催事を駆け足で振り返る報告漫画になります



近世日本における子どもイメージを
探っていく上で豊富な資料・史料が
求められるわけですが、寡聞にして
ドイツにもそんなに日本の資料・史料が
あることを知りませんでした……。

(日本語講演でドイツ語さっぱりな身には有難く……)

「小さな大人」としての子どもから、「子ども」へ
その視点から描き出される江戸時代の日本社会の姿に
へへえとなることじまり

時代劇好きなので
どうしても大五郎が
子どもの代表格が……

4月22日

第1回定例研究会
「日本における子どもと
子ども像の歴史
—江戸時代を中心として—」
ミヒャエル・キンスキー教授
(ゲーテ大学)

キンスキー先生は
精コミ研究科の方でも
ご講演してくださったのです。
ドイツにおけるヤパノロジー
Japanology/Japanologie
についてもお話を伺う機会を
いただけたのでした。
そして何故かBLの話題を
持ち出すのが私という存在。

2014年11月

1日～5日

昨年度、タイの
学際的シンポジウム
『社会・文化の多様性の
レンズを通しての知の構築』
において田中洋美准教授との
連名でポスター発表を
させていただいたのでした。

Ambivalences surrounding fujoshi's manga reading
their own works

第二回研究会の話題に行く前に
前年度タイにおいてなされた報告のタイトルを再掲します。

2: Ne
the **Enjoying Manga as Fujoshi.**

3: External and internal differences

田中洋美先生

fujoshi
腐女子

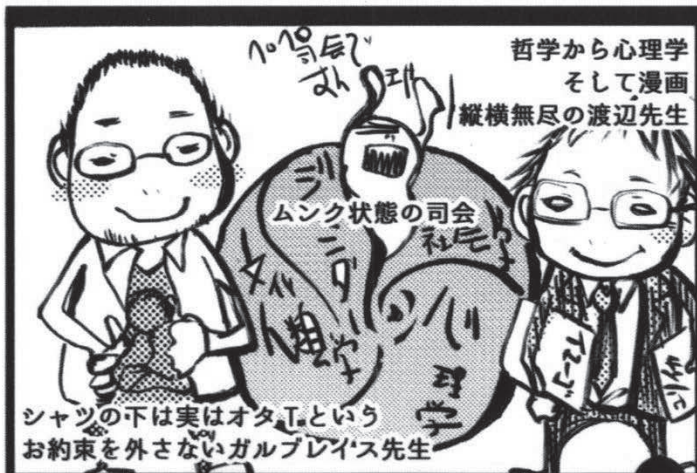
果物

「女性のおたく」の一分類として「腐女子」が挙げられます
(二次創作・同人に絞っても色々な嗜好の形態があります。
夢女子、百合女子、NL好きなどなど……)。
そして先の発表報告においては取り上げなかったのが
「男性のおたく」についてでした。

今回の発表は腐女子と呼ばれる女性達が
どのような読み方を原作作品に対してしているか、
そこから二次創作活動をする際どのような点を
重視するか、自分達をどのように捉えているかに
注目したものでした。

「YはYだよー!」
「YはYだよー!」
「YはYだよー!」

下の方



6月5日

第2回定例研究会
『おたく』とジェンダー—
ガルブレイス・パトリック・
ウィリアム氏
(デューク大学)

直前に会場変更するほどの
盛況ぶりでもとても嬉しく。
今回は「男性のおたく」に
絞っての講演でした。

「腐女子」に関してのお話も
また何処かの機会として
いただけたら私が勝手に
嬉しく有難いわけでして……



11月6.7日

国際シンポジウム
「学術分野の男女共同参画
と多様性」

今回は明治大学にて
開催されました。
昨年度尾お世話になった
先生方や院生の皆さんと再会。



11月27日

上映会
『PHD Movie 1&2』

北米の大学院を舞台に
博士後期課程にある面々の
悲喜こもごもな日常を描いた
コミックを映画化。
切実過ぎる白紙号問題…おお

※論文や業績欄がまっ白という意味



#Ally in white

この数十年

実はこの年齢になってようやく100%性別間違われなくなったのですがそれはそれで自身としては慣れなかつたり…



そんなこんなで「女性誌」なるものとも縁がない日々でしたが、社会の変化と共にそこまでダイレクトに内容も変遷していくのか……と。

正直アンアンとセブンティーンの違いも解らないまま対象時期過ぎましたよね！読モとかさっぱりですよ！

12月7~11日

「MEIJI ALLY WEEK」
明大生のためのイベント。

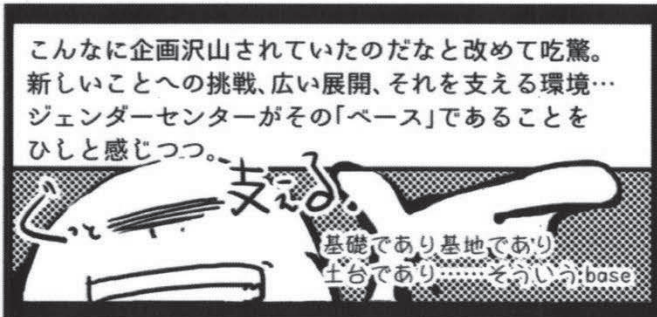
「ファッションを通して明治大学にLGBT支援者であるAllyを増やす一週間」を掲げ、ジェンダーセンターとしても初の試みとなる学生さんが企画・主体として運営したイベントでした。フライヤーの配布にファッションショーまで。

1月22日

第3回定例研究会
「フランスの女性誌史—誕生から黄金期そして暗黒時代と転換」
江下雅之教授
(明治大学)

在外研究されていた時期のフランス女性誌の歴史研究と比較が怒涛の如くの展開。ついていくの必死で……。

以上、本当に駆け足でしたが



こんなに企画沢山されていたのだと改めて吃驚。新しいことへの挑戦、広い展開、それを支える環境…ジェンダーセンターがその「ベース」であることをひしと感じつつ。

基礎であり基地であり
土台であり……そういうbase

自身至らぬ身ながら企画に関わらせていただく機会を頂戴しましたこと心よりお礼申し上げます。

感謝







定例研究会





2015年度 第1回定例研究会

「日本における子どもと子ども像の歴史 ―江戸時代を中心として―」

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【後援】 明治大学国際連携機構

【日時】 2015年4月22日(水) 18:00～20:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1F グローバルホール

【来場者数】 114人

【コーディネーター】 宮本真也(明治大学情報コミュニケーション学部准教授)

【コメンテーター】 出口剛司(東京大学文学部准教授)

【講師】 ミヒャエル・キンスキー教授

ドイツのゲーテ大学フランクフルト・アム・マインの日本学部にて日本文化史・思想史を担当する。現在の主な研究テーマは、海保青陵の思想の歴史的な文脈における再考と、近世期の日記類・指南書などを踏まえた日本の子供史である。

報告：宮本真也(明治大学情報コミュニケーション学部准教授)

本定例研究会は、2015年4月22日(水)18時より、明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント1F、グローバルホールで開催された。なお、講演者のミヒャエル・キンスキー教授は、明治大学国際交流基金事業の枠組において招聘された。コメンテーターとして、東京大学大学院人文社会系研究科の出口剛司准教授を招いた。また、コーディネーターと当日の司会は情報コミュニケーション学部准教授の宮本真也がつとめた。

キンスキー教授はドイツのゲーテ大学フランクフルト・アム・マインの日本学において日本文化史・日本思想史を担当している。教授の現在の研究テーマは、以下の二つに分けられる。

1. 海保青陵の思想をその時代の文脈のなかで考え直す：『稽古談』の英語訳を完成させ(巻1-4完、巻5未完)、包括的な概略と分析を準備する。文献批判に基づく『新・海保青陵全集』と注釈を目的とする研究グループを組織し、国際会議を準備する。
2. 日本の子供史：近世期の日記類・指南書などを踏まえて、江戸時代の子供像に迫ろうとする。P・アリエスとP・スターンズの方法論を考え直しながら、子供史を独立した研究分野として成立するため相応しいアプローチを考察する。

これらのテーマのなかでも、本研究会では二番目のテーマ、すなわち「日本における子どもと子ども像の歴史」について講演していただいた。



フィリップ・アリエスが指摘するように西洋の歴史においても「子ども」という表象、概念が近代の産物であるのと同様に、日本の歴史においても統一的な像が存在しなかったこと、まだまだ可能性のある研究領域であることをキンスキー教授はまず確認した。そのうえで教授は、江戸時代の子どもと子ども像の歴史について報告することの意味について考察を加えた。江戸時代のメディアを見れば、子どもが数多く描かれていることがわかる。浮世絵でも、娯楽のための読み物でも、ジャンルを問わず子どもの姿を発見することは確かに可能である。しかし、他方

で子どもの歴史、あるいは大人が持っていた子ども像を研究するには男性が残した文献しか拠り所にできないという事情がある。つまり、子どもが書かれている文献を残した男性が、どういう目で子どもを見て感想を述べたのか、など、男性をジ



ェンダー論の立場から取り上げた研究はまだ発展段階にある。子どものことを描写したり論じたりする男性をジェンダー論的に分析する研究はキンスキー教授によれば、まだ存在していない。それに加えて、江戸時代の子どもと子ども像については、当時の女性と女性像についてと同じように、当事者の視点（子どもの視点）からの資料があまりにも残されていないという難点がある。

それゆえ、江戸時代の子ども像については、社会学的、あるいは文化史的な研究の領域で議論されている成人の男性の見解に基づく構成であるだけで、そしてこの構成は子どもたち自体が経験する生活または成長の現実と無関係ではないかという疑問を常に維持し続けることが、重要となる。

こうした困難を念頭に置いた上で、キンスキー教授は江戸時代の文献から子どものさまざまな描かれ方を紹介するのであるが、それは矛盾に満ちていると言ってもよい。すなわち、親と死別した子どもを他の大人が引き取って育てる寛大さ、寛容さの物語もあれば、特定の日付で生まれた子どもの臓器が健康や長寿に効果を持ち、その信仰ゆえに子どもがさらわれ、残忍な殺され方をする物語もある。また、生類憐れみの令で有名な将軍徳川綱吉は捨て




子を引き受けたものに援助金を払う制度を作ったが、それを受けて、援助金を目当てに捨て子を引き受け、最終的にはその子どもたちを殺してしまう大人の集団も現れた記録も残さ

2015年度 ジェンダーセンター 第1回定例研究会
Meiji University Infocom Gender Center
Seminar Series #1

**日本における子どもと子ども像の歴史
江戸時代を中心として**

ミヒャエル・キンスキー教授 (ゲーテ大学)



ミヒャエル・キンスキー教授はドイツのゲーテ大学フランクフルト・アム・マインの日本学部にて日本文化史・日本思想史を担当する。本講演でキンスキー教授はエリック・エリクソン、フィリップ・アリエスの研究に基づき、近世日本の子どものイメージを、多くの資料をもとに浮かび上がらせることを目指す。アリエスに代表される「子どもの誕生」という視点から、江戸時代の日本社会、特にその親密圏をどのように描き出すのか、当時のジェンダー編成を知るうえで大変興味深い。

2015年4月22日 (水)
18:00 ~ (17:30 開場)
**明治大学駿河台キャンパス
グローバルフロント1F
グローバルホール**

●コメンテーター：出口剛司 (東京大学准教授)
※講演、質疑応答とも日本語で行います。

申込不要・入場無料 詳細は当センター HP をご覧ください。
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>

主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
後援：明治大学国際連携機構

れている。当時の状況には当然ながら、口減らしのための間引きや、人身売買があったことも忘れてはならない。このように、日本の歴史においては、ルイス・フロイスもまた驚嘆するほどの子どもをめぐっての寛大、寛容、慈しみといった肯定的な態度もあれば、身の毛もよだつほどの残忍、残酷な態度も認めることができるのである。

こうした江戸時代の子どもの像をめぐる矛盾を説明するときに日本において重要な役割を果たしてきた研究者として、キンスキー教授は民俗学者・柳田国男の名前を挙げる。端的に言うならば、日本の子ども史研究の領域では、日本では「七歳までは神のうち」という思想が根強く、この思想によって子

どもに対する親切さも残虐も捨て子や間引きなども説明されてきたのだという。どうせ小さい子どもがまだ完全にこの世界に属していなければ、あの世にかえしてもよいという信仰が起こりうるという説明が、非常に広く、強く日本の研究者のあいだでは共有され、柴田純の研究によると、この説明は柳田国男以前には見出せないという。

しかし、柴田の指摘にならうならば、柳田自身が「七歳までは神のうち」について正確な典拠を示すことができず、どの時代からの考え方なのか、どうして「七歳」なのか、などの説明は一切なされておらず、柳田の影響ゆえに民俗学を越えて、歴史学にまで、不正確な思想が浸透してしまっている。このことには、黒田日出男、宮本常一、大藤ゆきといった研究者たちも加担していて、基本的には柳田の仮説を、江戸時代あるいはそれ以前の時代の人々が子どもを神聖なる存在、神に近い存在とする文献を挙げることなく繰り返している。



キンスキー教授は最終的に、「七つまでは神の子」という言い回しに代表される神聖なる



存在である子ども像が、子ども史研究の束縛となり、文献を読む時に先入観として働いていることを指摘した。この思い込みや先入観から自由になることが、まず子どもを対象にする子ども史・子ども像の研究が、まともな研究

分野として認められる最初の条件であるとした。そのうえで忘れてはならない側面として、キンスキー教授は、人間が成長して行って子ども時代が終わったとしても、子どもであること自体が終わらないことを強調した。つまり、両親が存命である限り、あるいは死んでも人間が、「親」である人の観点からみればいつまでも「子ども」なのである。「子ども時代」の流動性・相対性がそこにも由来しており、それを歴史学的に把握することが一つの課題なのである。固定概念のジェンダー、社会層、民族などに、従来の政治史、社会史、文化史と相容れない子どもという流動性のある概念を取り入れることによって、歴史学全体が新たな段階に辿り着くチャンスを持っていることを、キンスキー教授は最後に指摘した。

講演後、コメンテーターの出口剛司准教授を始めとして、いくつかの質問やコメントが寄せられ、活発な議論が行われた。フロアからも、研究者だけでなく、学生からの質問も寄せられ、盛況であった。



2015 年度 第 2 回定例研究会

『おたく』とジェンダー

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2015 年 6 月 5 日（金）18:00～20:00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー1 階 1101 教室

【来場者数】 83 人

【コーディネーター】 田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【コメンテーター】 渡辺恒夫氏（明治大学情報コミュニケーション学部兼任講師）

【司会】 石田沙織（明治大学情報コミュニケーション研究科博士後期課程）

【講師】 ガルブレイス・パトリック・ウィリアム氏

デューク大学大学院文化人類学科所属。上智大学、テンプル大学非常勤講師。1982 年米国アラスカ州生まれ。2004 年、モンタナ大学在学中に交換留学生として初来日。その後、東京大学大学院に入学、学業の傍ら 2007 年から秋葉原ツアーを主催。2012 年、東京大学大学院情報学環・学際情報学府博士課程修了。博士（情報学）。著書に『The Otaku Encyclopedia』（単著、2009 年）、『Otaku Spaces』（共著、2012 年）、『Idols and Celebrity in Japanese Media Culture』（共編著 2012 年）、『The Moe Manifesto』（単著、2014 年）、『Debating Otaku in Contemporary Japan』（共著、2015 年）がある。

報 告：田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2000 年代以降、世界各地の大学の日本学科で日本のサブカルチャーに関心を持つ学生が多数入学する現象が見られる。他学部所属でありながら日本文化への興味から日本・日本語関連の科目を履修する学生も少なくないという。その背景には、マンガやアニメといった日本の大衆文化が国境を越えて消費されるようになったとことがある。今年度最初の本センター定例研究会の講師であるガルブレイス氏もまた、こうしたトランスナショナルな文化交通が進む中、日本の大衆文化への関心から日本研究に携わるようになった研究者のひとりである。

この度の定例研究会では、ガルブレイス氏をお招きし、氏の「おたく」に関する言説研究を中心にご講演いただいた。ご講演では、「おたく」という言葉の系譜をたどり、1970 年代以降「おたく」として何がどのように語られたのか、また「おたく」男性によるマンガの中の「美少女」崇拝がいかなるものであったかを論じてくださった。特に次の二点が、すなわち「おたく」とはもっぱら（特定の）男性を指す言葉として使われていったこと、かつ「おたく」とされた男性たちの「美少女」崇拝に男性性の問題が関係していたことがジェンダー



研究者にとっては興味深い論点であった。

講演ではまず、伊藤公雄氏の語りや永山薫氏の論考を参照しながら、1960年代から1970年代にかけて男性中心主義的な学生運動に馴染めなかった男性たちの中に少女マンガを愛読する人々が出てきたこと、それが少女マンガ様式によって描かれる男性向けの「エロマン



ガ」の登場につながっていったことが指摘された。そのようなメディアを消費したのは、グラビアではなく二次元の「美少女」を好む男性マンガファンであり、

彼らが「おたく」と呼ばれるようになったとのことであったが、そのような「おたく」言説は、「おたく」男性たちに対する偏見や差別的まなごしを多分に含むものであったという。このことが、主要ロリコンマンガ雑誌として人気を博した『漫画ブリッコ』（1982年刊行）に掲載された『「おたく」の研究』の考察を通して明らかにされた。

『「おたく」の研究』において、著者の中森明夫は、少女マンガといった女性領域に位置付けられるものを好み、二次元の女性に性的魅力を感じる「おたく」男性を「気持ち悪い」、「男性失格」と称した。実物の女性や成熟した女性のヌード写真に性的魅力を感じない「おたく」男性を「ビョーキ」とみなす中森の主張には、「おたく」男性を病理化する思考を見出すこともできるだろう。

1990年代になると、新しい「おたく」観が形成される。ガルブレイス氏によれば、1980年代終わりに起きた東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の犯人が『漫画ブリッコ』の愛読者であり、ペドフィリアであったことから、「おたく」とは、その犯人のように、マンガやアニメが好きで、性的に倒錯しており（ペドフィリア、二次元と三次元の女性の区別ができない等）、かつ犯罪者にもなりうる危険な男性であるというイメージが形成されていったという。また1990年代には「萌え」言説が登場し、二次元美少女に対する性的欲望を持つことが強調されていく。言い換えれば、「萌え」という言葉の台頭により、改めて「おたく」男性のセクシュアリティが論じられるようになったといえる。

しかし生身の女性と恋愛し、結ばれることをよしとする性規範に大きな変化は起きなか



った。2000年代にヒットした『電車男』（「おたく」男性を主人公とする小説として刊行のち、漫画や映画、ドラマとしてもヒット）では、主人公が偶然電車の中で助けた女性と親密になることがハッピーエンドとして描かれていた。また二次元キャラと（擬似的に）「結婚」する「おたく」男性が現れたが、そのパフォーマンスを真に受け止めた英米の主要メディアは、そのような日本人男性を見下すような論調で少子化社会日本を論じたという。皮肉なことに、1980年代の異性愛中心主義的かつ恋愛至上主義的な中森の言説が、グローバリゼーションが進んだ現在、形を変えて国際的に再生産されているとも解釈できよう。

以上のような内容の講演を受けて、コメンテーターの渡辺恒夫氏より、次の二点についてコメントをいただいた。

第一に、自らが1960年代に既に少女マンガに傾倒していた初期の「おたく」であるとした上で、ガルブレイス氏が今回考察対象とした1970年前後の時期よりも早く、少女マンガを愛読する男性が存在していたこと、また、ひきこもり同様、「おたく」男性も高齢化していることである。ガルブレイス氏が講演の冒頭で述べたように、「おたく」の定義は曖昧である。今回の講演では、「おたく」に関する言説分析が中心であったが、男性による少女マンガ愛読の歴史については、改めて精査する必要があるかもしれない。



第二に、1980年代の中森の論考や現在の海外メディアの報道において「おたく」男性が「男性失格」のレッテルを貼られていることについて、ジェンダー化されている現代社会において標準的ないし規範的な男らしさに馴染めない男性がいるのは当然であり、「おたく」を真の男ではないと捉えることは、男性にないものねだりをしているのではないかということである。近年のジェンダー研究でもっとも重要な研究テーマのひとつが、男性性（マス




2015年度 ジェンダーセンター 第2回定例研究会
Meiji University Infocom Gender Center
Seminar Series #2

「おたく」とジェンダー

ガルブレイス・パトリック・ウィリアム氏

講師紹介：デューク大学大学院文化人類学科所属。上智大学、テンブル大学非常勤講師。2004年に交換留学生として初来日。学業の傍ら秋葉ツアーを開催。東京大学大学院情報学環・学際情報学府博士課程修了。博士（情報学）。



「おたく」の起源は1970年代に遡るといわれている。当時、多くの青年がマンガ・アニメに熱中し、特に『宇宙戦艦ヤマト』や『ゲッターロボ』、『機動戦士ガンダム』といったSF作品が消費された。80年代に入ると、マンガ・アニメに登場する「美少女」に惹かれる男性が「おたく」と称されたが、所謂「ロリコン・ブーム」が起きる中で、「おたく」男性は問題視された。本講演では、「美少女」が生まれた70年代を振り返り、「おたく」がどのように語られたのか、その言説を探る。美少女コミック誌と『漫画ブリッコ』に掲載された連載記事、『おたく』の研究を取り上げ、「おたく」と「美少女」の関係には「男性失格」に対する恐れが潜在することを指摘するとともに、その恐れがいかなるものか、批判的に考察する。

2015年6月5日（金）
18：00～（17：30 開場）
明治大学駿河台キャンパス
リバティタワー ~~1113~~教室 *場所変更*
1011 教室

●コメントーター：渡辺恒夫氏（情報コミュニケーション学部兼任講師）
※講演、質疑応答とも日本語で行います。

申込不要・入場無料 詳細は当センターHPをご覧ください。
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>
主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

キュリニティ)の問題であり、男性たちが社会において覇権的な男性性として折り合いをつけているのかについて研究がなされつつある。「おたく」と称される男性も既存のジェンダー規範やジェンダー秩序によって生じる社会的制約の影響下にあるはずである。その葛藤の様子についての詳細な考察は、今後の研究に期待したい。

最後に、当日は学生から研究者に至るまで多数のご来場があった。それだけ「おたく」、そしてそれをジェンダー視点から論じることに関心が寄せられていたといえよう。聴衆の関心に十分応える内容の発表をしていただいたガルブレイス氏にこの場を借りて改めて感謝の意を表したい。



2015年度 第3回定例研究会

「フランスの女性誌史—誕生から黄金期そして暗黒時代と転換—」

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2016年1月21日（木）16:30～18:30

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー7階 1073教室

【コーディネーター】 田中洋美（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【コメンテーター】 高馬京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【来場者数】 28人

【講師】 江下雅之 明治大学情報コミュニケーション学部教授

東京大学理学部数学科卒業後、三菱総合研究所にて情報産業アナリストとして活動。1992年より1999年までフランスに滞在し、ESSEC、パリ第1大学、パリ第3大学で情報論、コミュニケーション論、メディア史等を研究。2014～15年にはパリ第13大学情報コミュニケーション学研究所（LabSIC）に客員研究員として招待され、主としてフランスの *presse féminine*（女性誌）の歴史研究に従事。

報告：高馬京子（情報コミュニケーション学部准教授）

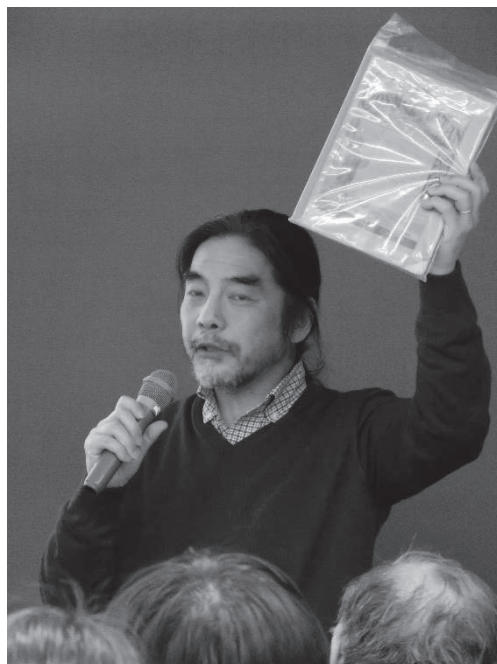
フランス女性誌とは、他国のものと同様、週間、月間に発表される、そのとき限定の女性にとって価値のある情報の詰まった、そして、その時が過ぎてしまったら読み捨てられる運命にある媒体であり、限られた図書館でしか通年的に保管はされていない。このことを裏返して考えてみると、女性誌を通史的に考察していくとは、まさにその時代、時代の社会状況、風俗、女性、ジェンダーの様子が色濃く反映されている貴重な情報源ということになる。確かに、写真等著作権のきれた女性誌の電子化がフランス国立図書館で進み、また昨今各有名女性誌が電子版を発行し始めてはいるものの、その両方にも当てはまらないフランス女性誌も多くあり、それを通史的に現物の資料を収集し、考察するという事は非常に困難な作業である。すなわち、女性誌とは時代を知る重要な資料でありながらそれを系統立てて資料を見ることは非常に難しいメディアなのである。報告者である江下雅之教授は、社会ネットワーク論、メディア史を専門とされ、長く研究滞在をされていた地、フランスの入手困難な女性誌という貴重な資料の収集を進めながら、そのフランスにおける女性誌史という貴重な研究をされている。

氏によると、フランス革命は制度面のみならず人々の価値観を大きく変容させ、そのなかで新聞や雑誌などメディアが発達し、女性を主たる読者とする女性誌が発達したのもその時期であり、女性誌の変遷は社会変化を反映しているという。フランス革命の経緯は明治維新を経験した日本社会と比較でき、また、第二次世界大戦は日本社会と同様にフランス社会にとっても大きな転換点となるなど、日仏の社会変化の歴史には共通点が見出されると



し、研究会では、まず18世紀から現代に至るまでのフランスにおける女性誌の歴史を概括し、続いて1960年代後半以降の市場構造の相違を含めて日本と比較することにより、両者の特徴的な状況を考察された。

氏はまずフランス女性誌史の大枠を保守性と政治性に二極化する黎明期、運動から消費へと転換が進む拡大期、復活後に陳腐化する黄金期～暗黒期、読者層のセグメント化が進む転換期の4期に分け提示された。①極端に貧弱だった庶民の衣食住、②布地屋と仕立屋の徹底的な分業体制、③女性ではなく男性がモードの主役、④限定かつ偏在的な出版物の受容といった女性誌に関わるフランスの社会状況として特徴を有した大革命以前と比べ、黎明期にあたる大革命後は、①フランス



の当時の社会状況として、②有閑層向け雑誌が伝統価値観を補強、③生活向上と都市化で雑誌への関心拡大、④7月～2月革命間のフェミニスト誌台頭、新しい読者層に急進的なテーマが浸透という特徴がみられるとする。また、第二帝政後の女性誌の拡大期には、①交通と通信技術の発達でプレスが飛躍、②町中に躍り出た女性が需要を一層拡大、③富裕層以外の



一般女性がマス市場を形成、④今日的な女性誌の主要な領域が勢ぞろいしたと考察する。また、女性誌の絶頂期から暗黒期にあたる戦後から五月革命時は、①新女性と保守的な女性とが共存し、②5月革命前後には先進的雑誌の陳腐化、③伝統的な実用大衆紙は時代遅れの烙印を押され、④経済危機と新メディアとの競合が圧迫したと分析を提示されている。そして、マーケティングの時代であるとする女性誌における転換期は、①もはや100万部の発行は実現が困難、②闘争的な段階が過ぎ個性尊重の方向、③カテゴリのセグ

メント化による多様性進展、④オリジナリティや高級感がキーワードであるとしている。さらにインターネットの出現に牽引される高度情報社会を迎えた今日では、フランスでもかつてのような紙媒体のみならず、ファッションブログ(blog de mode)の時代に突入しているとし、フランスにおける女性誌の歴史を入手困難な貴重な資料である女性誌を提示しながら示された。



2015年度 ジェンダーセンター 第3回定例研究会
Meiji University Infocom Gender Center
Seminar Series #3

フランスの女性誌史

誕生から黄金期そして暗黒時代と転換

江下雅之 情報コミュニケーション学部教授

講師紹介：東京大学理学部数学科卒業後、三菱総合研究所にて情報産業アナリストとして活動。1992年より1999年までフランスに滞在し、ESSEC、パリ第1大学、パリ第3大学で情報論、コミュニケーション論、メディア史等を研究。2014～15年にはパリ第13大学情報コミュニケーション学研究所(LabSIC)に客員研究員として招待され、主としてフランスの *presse féminine* (女性誌) の歴史研究に従事。



フランス革命は制度面のみならず人々の価値観を大きく変容させ、そのなかで新聞や雑誌などメディアが発達した。女性を主たる読者とする女性誌が発達したのもその時期であり、女性誌の変遷は社会変化を反映している。フランス革命の経緯は明治維新を経験した日本社会と比較でき、また、第二次世界大戦は日本社会と同様にフランス社会にとっても大きな転換点となるなど、日仏の社会変化の歴史には共通点が見出される。本講演では、まず18世紀から現代に至るまでのフランスにおける女性誌の歴史を概括し、続いて1960年代後半以降の市場構造の相違を含めて日本と比較することにより、両者の特徴的な状況を考察する。

2016年1月21日(木)
16:30～18:00 (16:00 開場)
明治大学駿河台キャンパス
リバティタワー 1073 教室



●コメンテーター：高馬京子
(情報コミュニケーション学部准教授)

申込不要・入場無料。詳細は当センターHPをご覧ください。
<http://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>
主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

フランスの女性誌を研究対象とする場合、モードに関する語彙の記号論的調査、女性性形成における女性誌の役割に関するフェミニズム的観点からの調査などみられるが、氏の研究のように21世紀現代のブログまでを射程に置いて社会を映し出す鏡としてフランス女性誌の通史をみたものは数少なくメディア史研究において重要な役割を担うと同時に、社会風俗調査資料としてのフランス女性誌の価値の再評価を示す貴重な論考であるといえるだろう。



上映会・学生企画イベント





映画上映会

“PHD Movie 1&2” 上映会

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2015年11月27日（金）18:00～20:45

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー地下1階 1001教室

【来場者数】 14人

【コーディネーター】 平田佐智子（明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）

【映画概説】 北米の大学院生たちの日常をコミカルに描き、院生たちから熱烈に支持された“PHD COMICS”の実写版映画。映画版でも、主人公セシリア（女性）とウィンストン（男性）ら大学院生の日常や悩みが、コメディタッチながらもリアルに描かれ、映画を観た大学院生からは「こんなこと確かにあるなあ」「この状況わかる」という共感の声が寄せられた。主人公たちの姿から、男女両方が直面するアカデミックキャリアの道程のさまざまな問題について笑いを交えながら考えさせてくれる内容となっている。

報告：平田佐智子（明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）

2015年11月27日に、PHD MOVIE 1&2の映画上映会を行った。本報告では、PHD MOVIEの概要ならびに上映会の様子、また上映会の参加者の感想を紹介する。

PHD COMICSという、大学業界を面白おかしく描いた英語の4コマ漫画を知っているかもしれない。北米の大学院を舞台として、そこに在籍する理系の大学院生やポスドク、教授陣たちの「アカデミアあるある」を題材としたコミックである。セリフなどはすべて英語だが、その内容は言語を超えて共感できるものである。アカデミアの中でも、特に理系分野では知名度が高く、主にTwitterなどのSNSで頻繁にシェアされている。作者のJorge Cham自身も物理学の学位を持っており、MITでポスドクをした経験がある。その後独立してPHD COMICSを始めとしたアカデミア支援活動を行っている。

そのJorgeが脚本を書いた、PHD COMICSの実写映画とも言える作品がPHD MOVIEである。漫画の中で繰り広げられた問答やネタが映画の随所にちりばめられている。2015年12月現在、2つの作品が公開されており、無印（前作）は2012年に公開され、新作（PHD MOVIE 2）はKickstarterで制作のためのファンドが募られ、2015年秋に公開された。

ポスドクである企画者はたまたまPHD MOVIE 2のクラウドファンディングに出資し、いち早くこれらの映画を観る機会があった。本作品は研究に携わるすべての人々を勇気づけることができると感じ、ジェンダーセンターに依頼し上映会を行うに至った。なお、前作は過去に多くの国内大学でも上映が行われているが、新作（PHD MOVIE 2）は公開されて間もないこともあり、本上映会が本邦初公開となった。



上映会は前半と後半に分かれており、前半ではPHD MOVIE 1を日本語字幕付きで上映した。休憩を挟んで後半ではPHD MOVIE 2を字幕無し状態で上映した。前半が字幕付きだったこともあり、後半の字幕無しバージョンはやや聞き取りが難しいとの感想があった。字幕は制作側が作成する物ではなく、ボランティアによる翻訳作業によるものであるため、新作の翻訳作業が企画されることを期待したい。

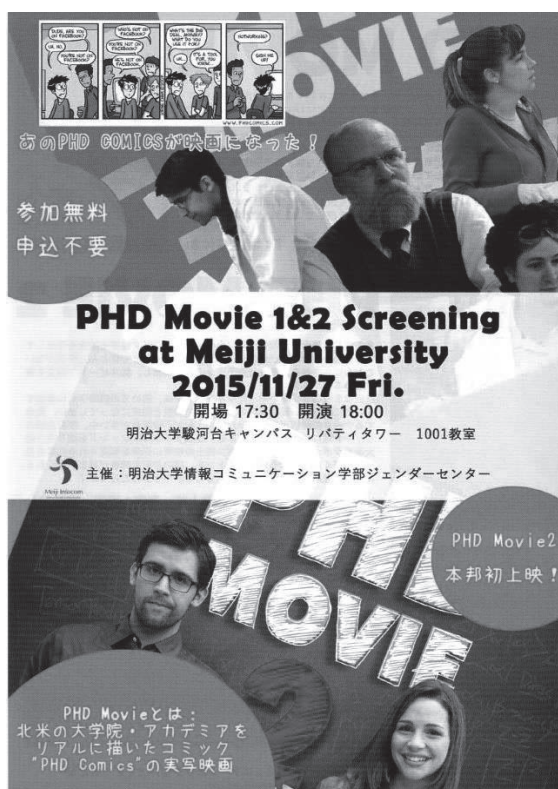
【PHD MOVIE 1のあらすじ】

舞台は北米のとある大学。その大学に在籍する二人の大学院生のエピソードが並行して綴られる。大学院生のセシリアはTAに意欲的に取り組んでいるのだが、学生達のやる気はなく、指導教授にも振り回される日々が続く。唯一の楽しみは放課後のダンス活動だが、TAの仕事が忙しくなかなか行けない。高校時代の同級生が順調にキャリアアップしている姿を見て、自分はなぜまだ大学院にいるのだろう、と自問する。もう一人の主演は名も無き男子学生で、PhDを取るため入れるラボを探している。どこもあまり良い対応をしてくれない中、ひとつだけ「ラボの手伝いをして結果が出せれば入ってもよい」ラボが見つかり、早速手伝いを

始める。ラボの機械がうまく扱えないまま期日であるシンポジウムは迫り、焦りだけが募る彼は、ミスで機械を壊してしまう。途方にくれる彼にラボメンバーが発した一言で、彼はまた走り出す。

●頂いた感想

- ・普段あまり我々が知ることのないアカデミックな話が、面白く表現されていました。院生の生活や勉強、そしてこれからの道が、やはり「普通」の人とちょっと違い、面白いこともあり、つらい側面があることがわかりました。
- ・とてもリアリティを感じました。帰って研究します。
- ・今まで全く知らなかったPhDについて、ポップなタッチで描かれていて、勉強になりました。





【PHD MOVIE 2のあらすじ】

舞台は前回と同じ北米の大学。セシリアは博士論文を提出してもよいことを指導教授から告げられるが、審査会までほとんど時間がないことも知らされる。審査員の予定を必死で調整し、猛スピードで論文を書き始めるセシリア。前回は名も無き学生であったウィンストンは、初めての国際学会に参加することになった。経費節約のためラボの教授と同室になってしまう、また発表するデータの解釈がうまくいかない、など不安要素が多い中、学会会場に到着する。そこには、所属するラボとフェンドを取り合う他大学のラボメンバーがいた。ボス同士の喧嘩に発表を邪魔される先輩を見て、ひどく心配になるウィンストンを、謎の年配参加者が励ましてくれる。果たして彼は無事学会発表を終えることができるのだろうか？

●頂いた感想

- ・1よりもドキドキする内容でした。学会発表のシーンはまさにツボです。博論公聴会も生々しかったです。エンディングは感動でした。生田キャンパスでは是非上映会を！！
- ・主人公が最後まで頑張って、自信を持って卒業できたシーンが非常に感動しました。

開催日時が金曜の夜ということもあり、あまり参加者が集まらなかったが、頂いた感想には好意的なものが多かった。また、参加者の感想にもあるとおり、開催地の適合性を再考する必要があると考える。本作品は物理学や理学を中心とした、理系の大学院生を扱っていたことから、文系学生が多く集う駿河台キャンパスではなく、生田キャンパスなどで上映を行うことで、興味のある学生がより足を運びやすくなったのではないかと。今後生田キャンパスでの上映が実現することを願っている。

また、個人的には、新作である PHD MOVIE 2 が「資金競争や学内の理不尽なシステムに負けることなく、研究を行う」ために、アカデミアにおける若手が、ベテランが、そして年長者がどのように振る舞うべきか、ということを端的に示した作品であると感じたため、学生・院生だけでなく多くの教職員の方々にも、是非観てもらいたいと思う。

最後にこの場を借りて、本上映会開催にあたり大変お世話になった田中洋美先生、細野はるみ先生、岩崎美香氏、横井淳子氏、関谷美由貴氏、そして上映会に参加して下さった皆様に深く感謝する。



学生企画イベント

MEIJI ALLY WEEK ～明治大学に LGBT 支援者である Ally を増やす一週間～

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【企画】 MEIJI ALLY WEEK 実行委員会

【概要】 2015年12月7日から11日にかけて学生企画として、LGBT（性的少数者、セクシュアルマイノリティの総称）の支援者を増やすためのキャンペーン“MEIJI ALLY WEEK”を実施した。Ally（アライ）とは、英語でAlliance（同盟）と語源を同じくする、「同盟者」「味方」という意味の単語。MEIJI ALLY WEEKでは、明治大学の学生に、ファッションを通してLGBT支援者であるAllyになる機会をつくり、「知る」「変わる」「広める」の3つの軸から、キャンペーン活動やイベントを展開した。

《MEIJI ALLY WEEK イベント》

◆Ally in White

～白いファッションアイテムを身につけて写真を撮り、発信しよう！～

キャンペーンカラーである白色のものを身につけて登校し、キャンパスに設置されているイベント専用のブースでパネル展示やスタッフとの交流を通じてLGBTやAllyについての理解を深めた。白いファッションで写真を撮り、#MEIJIALLYWEEKというタグを付けて、SNS等からシェアして発信した。

【実施日・会場】

2015年12月10日（木）駿河台キャンパス リバティータワー1Fエントランス

2015年12月11日（金）和泉キャンパス 第一校舎前

【参加者数】 800人超

◆Gender Gradation Fashion Show

～既存の男らしさ、女らしさにとらわれない「自分らしさ」を表現するファッションショー～

ショーを通して、世の中は「男」「女」だけではなくもっと多様であり、自分も多様な「性」のグラデーションの一部であるということを伝えた。LGBTもそうでない人も、すべての人が「自分らしさ」を見つけられるようなショーを目指した。

【日時】 2015年12月10日（木）18:00～19:30

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント1階 多目的室

【来場者数】 119人



報告：松岡宗嗣（明治大学政治経済学部 3年）

2015年12月7日から11日にかけて、「明治大学にLGBT支援者であるAlly（アライ）を増やす」をテーマに駿河台、和泉の2つのキャンパスでMEIJI ALLY WEEKを開催した。5日間をあわせ学内外から約1000の方が参加した。3月頃から企画が始動し、9人の実行委員メンバーとジェンダーセンターの先生方とともに、約半年間の時間をかけて本キャンペーンを実施することとなった。

開催にあたりかかる費用は、インターネット上で支援金を集めるクラウドファンディングサービスを利用し、予定していた額の倍以上の支援金が集まった。

期間中は3つのイベントが実施された。1つめが12月7日から9日にかけて



行われた「Knowing LGBT and Ally」ここでは、MEIJI ALLY WEEKの概要を含め、「LGBT、

Allyとは」「Allyになるための3ステップ」等を記載したフライヤーを駿河台キャンパス、和泉キャンパスで配布した。また、情報コミュニケーション学部を中心に、ご協力いただいた先生方の授業の冒頭でキャンペーンについて宣伝をした。2つめが「Ally in White」12月10日に駿河台キャンパス、11日に和泉キャンパスで開催されたこのイベントでは、参加者がキャンペーンカラーである白色のファッション



ョンを身につけて写真を撮り、LGBTやAllyについて発信した。参加した方へは株式会社チェリオコーポレーション様提供のライフガード（飲料）をプレゼントし、2日間で約800人を超える明大生が参加した。中にはこの日のために白いファッションを探してきたという学生もいた。

キャンペーンの存在を知らずに参加した学生も、LGBTに対して肯定的に捉えているひとが多く、

TwitterやFacebookをはじめとしたSNSで#MEIJIALLYWEEKや「LGBTについて知った」「Allyになった」というようなメッセージを写真とともに投稿し、LGBTやAllyについて発信した。





3つめが12月10日に駿河台キャンパスで実施した「Gender Gradation Fashion Show」。ここでは、既存の男らしさ、女らしさにとらわれない「自分らしさ」を表現するファッションショーを通し、世の中は「男」「女」だけではなく多様であるということ、LGBTもそうでないひとも含め、すべてのひとが多彩な性のグラデーションの一部であるということ传达了。Opening Actでは名古屋を拠点に世界で活躍中のダンスチーム BarnBeat が、枠にとらわれないオールジャンルなパフォーマンスでショーのオープニングを飾った。次に、Documentary では LGBT や Ally で構成された5人のモデルが、それぞれのセクシュアリティやファッションに対する考え方、感じ方を語ったドキュメンタリー映像を放映した。そして、Fashion Show へと移ると、ドキュメンタリー映像のフィナーレと連動し、映像の中で自身について語っていた5人のモデルが、男らしさ、女らしさにとらわれない自分らしさを表現した衣装を身にまとい、ランウェイを歩いた。



photo A

1人目のモデルの衣装 (photo A)。「花」や花柄のファッションは女性的なイメージが強いが、「花」=フェミニンではなく、「花」本来の美しさをファッションとして男性でも着こなすことができるというテーマで製作した。

1人目のモデルの衣装 (photo A)。「花」や花柄のファッションは女性的なイメージが強いが、「花」=フェミニンではなく、「花」本来の美しさをファッションとして男性でも着こなすことができるというテーマで製作した。

た。

2人目と3人目は同性婚のイメージ(photo B)。画像左側のモデルは、からだの性は男性で、こころの性は男性でも女性でもないというセクシュアリティのため、男女どちらの魅力も出せるようパンツスタイルのウェディングドレスを製作。右側は男性でも脚線美を表現できるということ、胸から溢れ出る花は自分の中にある魅力を閉じ込めず解放したいという意図でデザインした。



photo B

4人目はトランスジェンダーのためのマタニティウェア(photo C)。現行の法律ではトランスジェンダーの人が戸籍を変更するためには、生殖器を取り除かなければならない。これは、トランスジェンダーの人が子供をもつということを法律によって制限している。トランスジェンダーであろうと、同性愛であろうと、家族を持ちたいと思うなら、その権利はしっかりと保証されるべきだという思いを込め、女性用だけではない、かつこいマタニティウェアを製作した。



photo C



5人目のモデルの衣装(photo D)。光の三原色である、赤、青、緑を集めると白色になるように、白色の中にはあらゆる色が含まれている。これが Gender Gradation のテーマにも当てはまるのではないかと考え、LGBT もそうでないひと全員が多彩な性のグラデーションの一部であるというメッセージを込めてデザインした。

最後は、5人のモデル全員でランウェイを歩き、フィナーレを飾った。

そして、Talk Live では、衣装のデザイン・製作の担当者による解説のほか、MEIJI ALLY WEEK 開催の経緯などを語った。特に LGBT、Ally と区別してしまうことがかえって差別化につながって



photo D



しまうのではないかと
いう点について、この
イベントでは、アライ
のコンセプトカラーで
ある「白」を実行委員
内のLGBT当事者も身
にまとっていて、
LGBT と Ally を区別
していないということ、
ゲイはレズビアン等そ
他のセクシュアルマ

イノリティの Ally になることができるかもしれないというように、あらゆる「違い」に対して味方でありたいと思った時、その人は誰かにとって Ally なのではないか。MEIJI ALLY WEEK が提案する Ally はそういった存在であるということ語った。

12月11日の Ally in White 和泉キャンパスにて、MEIJI ALLY WEEK は終了となった。本キャンペーンを実施するにあたり、クラウドファンディングを通して支援していただ



いた方々、初めての学生企画を快く応援していただいたジェンダーセンターの先生方、実行委員メンバーや当日お手伝いしていただいたスタッフの皆様、企画を常に見守り共に歩んでいただいた田中先生、そして MEIJI ALLY WEEK にご参加いただいた皆様に、改めてお礼を申し上げたい。

Ally という存在が少しずつでも増え、LGBT を含めたすべてのひとが「自分らしく」生きることのできる社会の実現を目指し、こういったムーブメントが他大学をはじめ、多くの場所に広がっていくことを願う。



他機関との連携





*** 特別講義 * ***

明治大学大学院情報コミュニケーション研究科特別講義
「フィールド調査で語られない性」
後援：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

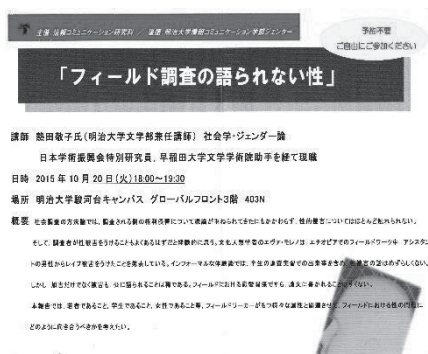
【日時】 2015 年 10 月 20 日（火） 18:00～19:30

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 3 階 403N 教室

【主催】 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科

【講師】 熱田敬子氏（明治大学文学部兼任講師）

【概要】 社会調査の方法論では、調査される側の権利侵害について議論が重ねられてきたにもかかわらず、性的侵害についてはほとんど触れられない。本報告では、若者であること、学生であること、女性であること等、フィールドワーカーがもつ様々な属性と関連させて、フィールドにおける性の問題にどのように向き合うべきかを考えた。



**** イベント ****

明治大学専任教授連合フォーラム「明治大学の男女共同参画」
後援：情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2016 年 1 月 19 日（火） 18 : 00～

【会場】 明治大学駿河台キャンパス リバティタワー16 階 1163 教室

【主催】 明治大学専任教授連合会

【概要】 日本における教授（女性研究者）は、いまだ 14.6%となっており、諸外国と比べても低い数値となっている。とりわけ理工系では、研究者比率が低い状態にある。

本学は、2014 年 10 月に文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」に採択されたことを受け、「女性研究者研究活動支援事業推進本部」（通称 MUSED）を設置した。MUSED は、理系分野をはじめ、本学全体で大学院の女子学生・女子研究者を増やし、トップクラスの研究者を養成するとともに、男女共同参画を一層推進するため、7つのテーマに沿って女性研究者研究活動支援体制を構築し、活動を行う。スーパーグローバル大学創成支援事業によるダイバーシティの高まりと本事業とのシナジー効果を大いに発揮して、グローバル時代にふさわしい、都市型の大規模総合大学らしく、女性研究者支援や男女共同参画推進においても一層推進を目指している。



研究プロジェクト





「女性専門職の過去・現在・未来」

Women in professional occupations: The past, the present, the future

武田政明・吉田恵子・細野はるみ・平川景子・長沼秀明・岡山礼子

人は、だれでもがその能力と希望に応じて、その選択した職業を通じて、自己実現をはかり社会貢献をする。そのことによって、社会は、安定的に維持され発展の継続がなされる。したがって、職業の選択と遂行の場面において、必要な能力の獲得と自由な選択意思および円滑な遂行を阻害する要因となるものの分析は、きわめて重要である。このことは、現在でも数々の点で克服できていない女性の職業選択の自由および職業継続・遂行の阻害要因を根源的なところから除去する解決手段を考える際にも同様である。本研究は、かつては、女性が選択することができなかった、いわゆる女性専門職に注目し、女性がその専門職に就くために克服していった過程を、それぞれの時代ごとに、政治、経済、文化的背景等を十分に踏まえて総合的に研究する。

<2015 年度の成果>

専門職としての女性医師については、時代区分を大きく3つに分けて、それぞれの区分ごとに、その時代の特徴を形成する社会事象・各種制度と関連づける形で研究をした。第一の区分は、19世紀半ばのオランダ医学の伝来から明治初期の医術開業試験制度の成立を経て、明治10年代の官立大学・官公立専門学校の設定から教育制度において女子教育の目的が明確にされた明治時代末期までである。第二の区分は、女子医学専門学校が登場する大正時代から第一次世界大戦を経て、軍国化を深めてゆく昭和初期までである。第三の区分は、昭和初期の戦時体制から戦中、戦後にかけての時代である。女性看護師については、専門職としての形成課程における重要な問題を大きく3つに分けて、それぞれについて時系列的に分析研究した。第一は、仕事としての医師の仕事との峻別の確立のなかで見られる問題である。第二は、近代的看護教育制度の確立との関係で認められる問題である。第三は、日本軍国主義のなかでの日本赤十字社の理念との相克という問題である。女性弁護士については、現代につながるジェンダー的視点を着実に踏まえて、その誕生の背景から、誕生の実現を研究した。



「企業における女性の活躍促進に関する調査研究」

Strategies for promoting women in companies

牛尾奈緒美

女性管理職の増加に向けた取り組みが多くの日本企業で採用されるようになっており、いくつかの先進企業では、生え抜きの女性が執行役員などの重要ポストに抜擢されるまでになってきた。反面、企業組織には女性の就労継続や昇進に関して男性とは異なる問題が残存しており、その実態を解明し問題解決につなげていく努力が必要とされている。そこで、本研究プロジェクトでは、組織内で女性従業員が抱える就労問題や心理的ストレス、組織内の制度的問題点などについて調査研究を行っていく。研究にあたっては、大規模な質問紙調査による従業員意識調査や、インタビュー調査などを実施し、研究成果として発表する予定である。

<2015 年度の成果>

女性活躍推進法の施行を見据え、多くの企業で女性管理職の増加に向けた取り組みが行われるようになってきた。女性の管理職割合は依然として低位であるが、管理職に就く女性ならではの就労問題、男性とは異なる職場内の立場から特有のストレスを抱えているケースがあることがわかってきた。

そこで、本研究プロジェクトでは、人材コンサルタント会社の協力を得て、19 社 21955 人の従業員を対象に質問紙調査を実施し、管理職・非管理職双方に対して男女別分析を行い、性と職位によるストレス反応を統計的に解析し、その結果から、今後の女性の活躍推進における問題点や解決策を検討した。成果は学会誌への査読付き論文、専門雑誌への寄稿、学会での口頭発表、講演会、シンポジウムでの講演等、多様な形式で行った。

なお、実証研究と同時並行的に従業員へのインタビュー調査も実施しており、こうした調査は来年度以降も継続的に行っていきたいと考えている。



「後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続」

Gender norms in the post-modernity: Change and continuity

田中洋美・石田沙織・他

近代化の過程で形成された伝統的なジェンダー規範は、後期近代とされる現代社会においてもジェンダー関係の社会構造を根底から支える、いわば通奏低音のような役割を担っている。本プロジェクトでは、伝統的ジェンダー規範の変容に関わる女性の集合行為を考察する。今年度は二つの集合行為を取り上げる。反DV政策形成過程における女性の集合行為とメディア空間に見られる女性コミュニティである。

<2015年度の成果>

前年度に引き続き(1)反DV政策形成過程における女性の集合行為と(2)メディア空間で形成される女性コミュニティに関する研究を進めた。(1)については、インタビュー・データの分析を終えた。今後は分析結果の考察を進め、論文にまとめる予定である。(2)については、これまで行ってきた腐女子研究を余暇研究の枠組みで捉え直し、彼女らのマンガ消費が余暇として持つ目的と意味について検討した。今後は考察を進め、その結果を学会で発表する予定である。



業績一覽(2015 年度)





◆◇ジェンダーセンター運営委員業績一覧（各 50 音順）◆◇

論文

牛尾奈緒美・宇佐美尋子・志村光太郎（2015）「女性管理職の職場ストレスに関する組織的要因－性差・職位差を踏まえた検討－」 人材育成研究, 第 10 巻第 1 号, pp.3-14.

牛尾奈緒美（2016）「女性の活躍を促す法務部づくり」 ビジネス法務, Vol.16 (2), pp.60-64.

Tanaka, H. & Ishida, S. (2015). "Enjoying Manga as Fujoshi: Exploring its Innovation and Potential for Social Change from a Gender Perspective". *International Journal of Behavioral Science*, 10(1), pp. 77-85.

著作・編著

Holthus, B., Huber, M. & Tanaka, H. (2015). *Parental Well-Being in Japan*. Tokyo: Deutsches Institut für Japanstudien/ Stiftung D.G.I.A.

学会発表・報告

Tanaka, H. (2015). "Living as a Researcher in the Twenty-first Century: Opportunities and Obstacles to Women's Academic Career: An introduction". The First Sectional Session, Session A, International Symposium "Gender Equality and Diversity in Research Environment", Meiji University, November 7, 2015.

田中洋美（2015）「男性カテゴリーの使用ならびに研究者は研究コミュニティ内外でいかに語ることができるのかについて」国際ジェンダー学会年次大会、ラウンドテーブル『『男がつらいよ』書評セッション』、東京女子大学、2015年9月5日。

松山真太郎・志村光太郎・宇佐美尋子・牛尾奈緒美（2015）「女性管理職の心理的ストレス・プロセスの検討－男性管理職との比較検討より－」第 31 回産業・組織心理学会大会における学会発表、明治大学、2015年8月25日。

講演録、対談・インタビュー録

池田一義・牛尾奈緒美（2015）「巻頭対談 女性が輝く社会に向けて－大学の役割：埼玉りそな銀行 社長池田一義氏X牛尾奈緒美」明治大学広報誌メディアガイド, vol.5, pp.1-8.

牛尾奈緒美（2015）「女性の活躍を促進する人材育成を考える」（2014年12月7日開催 人



材育成学会第12回年次大会 パネルディスカッション「多様性時代の人材育成」でのパネリスト講演), 人材育成研究, 第10巻第1号, pp.43-60.

牛尾奈緒美 (2015) 「カギは「思い込み」の解消と、2つの施策 優秀な女性のやる気を維持し、ロールモデルを増やしていくには 牛尾奈緒美インタビュー」人材教育, vol.27(1), pp.32-35.

牛尾奈緒美 (2015) 「女性の活躍 企業変える: 中日懇話会 牛尾奈緒美講演」中日新聞, 中日新聞本社版, 2015年2月20日朝刊3面

牛尾奈緒美 (2016) 「2016年新春座談会 明治大学の“女子力” 次代を拓く女性像とは」明治, 第69号

牛尾奈緒美 (2016) 「2016年新春座談会 明治大学の“女子力” 次代を拓く女性像とは」明治大学広報, 第687号, 8・9面

講演

牛尾奈緒美 (2015) 「“なりたい自分にきつとなれる” 自ら道を切り拓いてきた3人の女性によるトークセッション」特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク・Eyes for future by ランコム主催「Eyes for future by ランコム 第三期開講記念 特別公開講座」講演, 石巻中央公民館, 2015年4月22日.

牛尾奈緒美 (2015) 「女性リーダーが企業を変える 管理職育成の鍵とダイバーシティを生かす組織の要件」インヴェンティヴ・ヘルス・ジャパン合同会社主催「第五回 IHJ セミナー」講演, 野村コンファレンスプラザ日本橋, 2015年5月28日.

牛尾奈緒美 (2015) 「女性が輝く企業を目指してみんなで進める「女性活躍推進プロジェクト」」村上開明堂「女性活躍推進PJ」主催講演会, 村上開明堂本社, 2015年6月12日.

牛尾奈緒美 (2015) 「理工系女子のキャリア形成と進路指導」(総合司会) 一般社団法人日本MOT振興協会主催「女性の活躍舞台づくり」シンポジウム, 日本工業倶楽部大会堂, 2015年6月15日.

牛尾奈緒美 (2015) 「女性リーダーを組織で育てるために」日本生産性本部主催講演会, 帝国ホテル, 2015年7月2日.



牛尾奈緒美 (2015) 「共同通信社における女性の登用とコンプライアンス」 共同通信社コンプライアンス委員会における講演, 共同通信社本社役員会議室, 2015年7月9日.

牛尾奈緒美 (2015) 円卓会議「Board Diversity: 女性役員が違いをつくる」(講演者)「第20回 国際女性ビジネス会議」, ホテルグランドパシフィック Le Daiba, 2015.7.26.

牛尾奈緒美 (2015) ハイレベル・ラウンドテーブル「平和構築と女性」(スピーカー) 外務省主催「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム World Assembly for Women WAW! 2015」, グランドプリンス子テール新高輪, 2015年8月29日.

牛尾奈緒美 (2015) 「ダイバーシティを推進する女性の力」 浅草中央ロータリークラブ勉強会講演, 浅草ビューホテル, 2015年9月9日.

牛尾奈緒美 (2015) 「Board Diversity: 女性役員が違いをつくる」(スピーカー) 表参道カレッジ主催フォローアップ講座, イーウーマン本社, 2015年10月21日.

牛尾奈緒美 (2015) 「ダイバーシティが人と組織を元気にするー女性の活躍推進の意義」 衛星放送協会主催「第9回 人材育成セミナー」基調講演, 明治記念館, 2015年12月10日.



2015 年度 ジェンダーセンター運営委員会会議録

第 1 回運営委員会 2015 年 4 月 8 日

第 2 回運営委員会 2015 年 5 月 8 日

第 3 回運営委員会 2015 年 6 月 5 日

第 4 回運営委員会 2015 年 10 月 9 日

第 5 回運営委員会 2016 年 1 月 21 日



2015 年度 ジェンダーセンター運営委員

●委員長兼センター長

細野 はるみ

●副委員長兼副センター長

牛尾 奈緒美

●学部内委員

山口 生史

武田 政明

鈴木 健人

宮本 真也

田中 洋美

内藤 まりこ

●学部外委員

高峰 修（政治経済学部）

●学外委員

出口 剛司（東京大学）



編集後記

編集後記の執筆に頭を悩ます者にとって、年始から続く「子育て」「イクメン」「親密圏」「女性研究者」をめぐるゴシップの豊作は一見してありがたいように見える。しかし、ジェンダーにアカデミックにアプローチするものには、事態はあまり喜ばしいものではない。いくつかの騒動の背景には確実に、「子育て」「イクメン」「親密圏」「女性研究者」を支持するもの側にもある「道具化」と、それらが不本意な結果を生みだしてしまったことを「それ見たことか」と非難しつつ喜ぶメンタリティがある。正しく扱われるべき問題が、ふさわしくない意図のもとで利用され、結果的にそれが不首尾に終わり、最終的には問題そのものの重要性が矮小化されてしまうという図式である。ジェンダーは言うまでもなく、政治的なテーマでもあるが、その圏域へと吸い込まれてしまうと、ただのイデオロギーと変わらない。本年度のジェンダーセンターの成果としては、学生主体で企画、運営された **Meiji Ally Week** とファッションショーを第一に挙げることができるだろう。多くの学生たちに **LGBT** の理解を広め、会場に訪れさせ、メディアでもなんども取りあげられたという点では大成功であったと思う。今後もそれらの活動の発展を期待したいし、私たちはそれを支援したい。ジェンダーセンターが「ジェンダー研究所」ではない理由は、大学にありながら、社会に開かれた場所であるという理念にある。そうだからこそ、「はたしてそれが妥当かどうか」という真理への配慮を忘れないでいたい。ミネルヴァの梟が黄昏に飛び立つように、私たちもためらいながら飛ばねばならないだろう。

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターの『2015 年度年次報告書』をお届けします。ここに報告されているシンポジウム、研究会、特別講演会、フォーラムに参加し、協力して下さったすべてのみなさんに、心より感謝いたします。

ジェンダーセンター運営委員 宮本真也

今年度もジェンダーセンターでたくさんのイベントを開催した。どのイベントもそれぞれ訴えかけるものがあつたが、とりわけ、**LGBT** の理解者である“**Ally**”を増やそうという意図のもとに学生によって企画された“**MEIJI ALLY WEEK**”には目を見張るものがあつた。イベントのための資金はクラウドファンディングで集められ、**Gender Gradation Fashion Show** の衣装は有志の学生によって手作りされた。**Fashion Show** にはこれまでジェンダーセンターのイベントに足を向けたことのない人々も大勢来場された。さらにこのイベントの中で最も印象深かつたのは、**LGBT** の当事者の学生から「自分たちも、(**LGBT** 以外の人に対しての) **Ally** になれる」という発言があつたことである。マイノリティ側とマジョリティ側の幸福追求が排他的に成立するのではなく、相互に尊重されて追求されるときに社会全体の上昇スパイラルが起きていく未来を予感させる。それぞれのイベントから撒かれた小さな種が少しずつ育って大きく実を結ぶ日が来ることを期待したい。

ジェンダーセンター事務局 岩崎美香



ジェンダーセンター年次報告書 (2015 年度)

-
- 2016 年 3 月 31 日発行
 - 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター